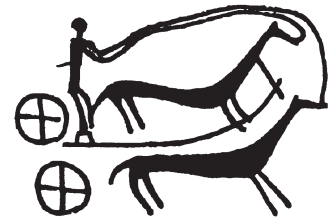


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 77



平成 20 年度「次世代 FD 研究会」の活動 (4 ページ)

2008 年第 2 回クラス担任会議 (学生支援 FD) を開催
(13 ページ)

来年度, 授業改善の切り札「クリッカー」貸し出し開始
(14 ページ)

准教授に三上先生が着任 (15 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

大学の社会貢献とこれからの生涯学習

生涯学習計画研究部長 松井 博和

札幌にこの冬初めての本格的な積雪があった 11 月 20 日の夕方, 遠友学舎のホールは 80 人近い人たちが熱気にあふれていました。「遠友学舎炉辺談話」の今年度第 1 回目として, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター長の常本照樹教授による講演「アイヌ民族が先住民であるという意味」が行われました。

遠友学舎炉辺談話は, 市民や学生・教職員が, 北大を代表する研究者の話聞きながら対話できる発見と学び合いの場として, 私たち生涯学習計画研究部が開いている催しです。路面が凍りつく寒さの中, 集まってくださった参加者の方々と常本先生の活発なやりとりを聞きながら, 全学・各部局の公開講座をはじめ, 北海道大学に対して寄せられる生涯

学習機関としての役割への期待の大きさを, ひしひしと感じた夕べでした。

生涯学習という言葉から, 私たちは何を頭に描くのでしょうか。少子高齢化が進む我が国の社会にあって, 生涯にわたる学び (ライフ・ロング・ラーニング) がますます重要になることは間違いありませんが, それに対し, 北海道大学はどのように貢献できるのでしょうか。平成 20 年 4 月から生涯学習計画研究部と関わりをもつことになったのを機に, これまでの研究者・大学教員としての経験を踏まえつつ, 最近考えていることをここに述べてみます。

生涯教育・生涯学習の始まり

生涯学習論の教科書をひもとけば、生涯学習の始まりとして、1965年、ポール・ラングラン女史(Lengrand, P, UNESCO 成人教育課長)が、幼い子供時代から死に到るまでの人間の一生を通して行なわれる教育の過程を創り上げ、活動させる原理として生涯教育という構想を提言したことが記されています。なるほど、多くの国の教育は、6歳頃から20歳代までに集中しています。考えてみると、これらの少年期や青年期は生涯にわたって社会で学ぶための基礎知識を身につけ、学び方を学ぶのが主です。つまり、その後の学びについても国や関係機関はフォローすることが重要と考えられます。

ナイロビで開かれたユネスコ総会で、生涯教育と生涯学習が併記されたのは1976年です。その後、21世紀教育国際委員会において、生涯学習こそ21世紀の扉を開く鍵と位置づけられました。1996年には「ヨーロッパ生涯学習年」事業が、1999年には「ケルン憲章—生涯学習の目的と希望」がG8で採択されました。

我が国の動き

日本に目を向けると、1981年、中央教育審議会が「生涯学習とは、各人が自発的意志に基づいて行うことを基本として、自ら自己に適した手段・手法を選んで、生涯を通じて行うもの」として、それまでの生涯「教育」と区別する形で、生涯学習の概念が打ち出されました。1988年には、当時の文部省において社会教育局が生涯学習局に改組され、1990年には生涯学習振興法（生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律の略称）が制定されました。これに連動して、大学院の入学や修士および博士の取得資格に、ずいぶん変更がみられたようです。

社会人特別選抜もその一つといえるでしょう。また、日本各地には夜間大学院や生涯学習センターの設置もみられました。教育内容の多様化が進み、公開講座の開講と拡充、施設の開放、サテライト的学習の場の提供など、「大学の開放」がどんどん進む結果となりました。今振り返ると、大学の大きな行事の1つである卒業式が「学位記授与式」と呼ばれるようになったのはこの頃と思われまふ。生涯学習という観点から考えると、「卒業」は人生を閉じる時となるでしょう。

大学の三つの使命:教育, 研究, そして「社会貢献」

これまでの大学では、教育と研究が大きな使命でした。これらを通して、我が国や世界に貢献する優秀な人材を育成することが大学に課せられた命題でした。21世紀に入り、急激な社会変動への対応、高度情報化社会への対応、グローバル化への対応など、今大学には、新たな使命として「社会貢献」が加わりました。時代の要請により大学の役割が変化したといえます。

最近の日本人の意識調査によると、日本が安全で安心な国と思っている人が近年激減したといわれています。世界で一番安全な国とうたわれたのは遠い昔のことのようです。犯罪的な観点とは別に、地球が抱える大きな課題、すなわち食糧や水問題、環境問題、エネルギー問題がクローズアップされ、将来を悲観視する人が増えてきました。今後起こりうる危機にいち早く気づき、その解消につながる科学の発展や技術の開発を行うのが科学者の使命であるとともに、新しい科学や科学技術を伝え、市民に安心してもらえるようにするのが大学や行政の役割といえます。

「産学官」連携による科学技術の振興は、大型の競争的資金も用意され、科学技術基本計画に則って世界的な「知の競争」に遅れまいとされていますが、市民、国民全体での科学や科学技術の理解や知識の共有は非常に遅れています。日本の各大学がその存する地域や地方に対し、何らかの手段でこの状況を改善していくことが期待されています。大学の国際化、高度化が求められ、一方で地域社会への貢献も期待され、不可能とも思える一人何役ものことを大学が果たさなければならないようですが、役割分担を工夫して知のPRや、「産学官民」での協働作業をこれまで以上に充実する必要があるでしょう。これが国民への説明責任の一つでもあります。

世界的な人口問題とは別に、日本においては少子高齢化が進んでおり、仕事と子育ての両立、団塊の世代の再教育支援など、新たな社会教育の需要も生まれています。ここでも、地域社会における大学への期待は大きいのです。

これからの生涯学習

地域や社会の新たなニーズに大学が応えるとしても、そのニーズは多様であり、貢献の仕方も色々あるでしょう。求められる課題を総合的な視点から俯瞰し、各課題の優先順位が明確になるように交通整理をし、大学の窓口として社会との接点となるのが大学における生涯学習担当部門の役目だと考えています。これまでは、生涯学習者というとシニアを思い浮かべ、知識欲の旺盛な年配者に公開講座等のサービスを行うというイメージが強かったのですが、それに加え、これからは大学人と市民が協働で問題解決に取り組むといった現役の社会人との作業も多くなると予想されます。

科学や技術の紹介や一般的な専門型問題の協働解決の他にも、地域づくり、地域の人づくりはもとより、国民全体の人間力の向上、家庭教育の向上、地域の教育力の向上、地球的視野の拡大、地球市民の育成などがこれまで以上に求められています。その場合、地域社会からボトムアップで新しい「公共」

を立ち上げていくようなシステムや担い手を育てていくような取り組みが必要になるでしょう。こうした状況の中で、大学は、様々な年代の市民のエンパワーメントを支援する生涯学習機関として、これまで以上に大きな役割を期待されることとなります。

多くの大学では、地域連携推進機構、地域連携協働センター、地域連携推進センターといった「地域連携」「地域協働」をうたった組織が作られつつあります。産学官連携によるベンチャービジネスなども共通する面がありますが、成功の鍵は、「つなぎ役」「橋渡し役」の組織や人材です。それらに関わる教員に対しては、従来の研究業績中心の評価に加えて、新たな視点からの評価・処遇のシステムを構築する必要があるでしょう。私たち生涯学習計画研究部も、大学と社会の双方向的なコミュニケーションの橋渡し役、大学と社会のインターフェースとして、全学の皆さん、広く学外の皆さんに喜んでいただける組織となるよう努めていきたいと思ます。
(農学研究院 教授)



平成 20 年度「次世代 FD 研究会」の活動

高等教育開発研究部では、大学院におけるFDの拡充を目指して、「次世代FD研究会」を設置し、平成20年度から3年間の計画で、授業改善・カリキュラム開発・授業コンサルティングを進める次世代FDプログラムの開発の研究を進めています。以下、今年度の活動の概略を紹介します。

1. 中国・清華大学・教育改革フォーラム参加：細川敏幸，5月12日(月)～13日(火)
 - * インディアナ大学 Dr. Alexander C. McCormic の National Survey of Student Engagement についての報告に注目。
2. 第1回研究会，5月15日(木)
 - ①報告「北大の各部局FDの現状について」
医・小華和柁志，歯・八若保孝，工・馬場直志，水産・栗原秀幸
*平成20年度までに，学内18研究科等のうち17部局でFDが実施されている。詳細は高等教育ジャーナル第16号に報告を掲載。
 - ②報告「FDの全国的な状況について」
筑波大・小笠原正明
 - ③報告「これからのFDについて—米国での調査から」北海道教育大函館校・宇田川拓雄
3. 愛媛大学視察（授業コンサルティング等）：安藤厚，細川，5月19日(月)～21日(水)
4. 研究会サブグループ会合，6月20日(金)，7月16日(水)
5. カナダ・ダルハウジー大学 (TA Professional Development Days)，米国・コロンビア大学 (NY)，シラキュース大学，ワシントン大学視察：山岸みどり，山田邦雅，文・瀬名波栄潤，9月8日(月)～20日(日)
6. POD (Professional and Organizational Development Network in Higher Education) (米国・ネブラスカ州)，マサチューセッツ大学視察：西森敏之，細川，小笠原，教務課・馬淵奈美，10月21日(火)～30日(木)
7. 平成20年度第2回クラス担任会議（学生支援FD）：安藤，10月28日(火)
 - *グループ討論（「自殺防止」「修学支援」の方策について）の指導
8. 第2回研究会，11月13日(木)
 - (1) 報告 10:00-12:00
 - ① ダルハウジー大学 (カナダ) TA Professional Development Days 等の視察から (山岸，山田，瀬名波)
 - ② POD (Professional and Organizational Development Network in Higher Education) (米国・ネブラスカ州)，UMASS 等の視察から (西森，細川，小笠原，馬淵)
 - ③米国の大学教員養成—西海岸ベイエリアの事例報告 (宇田川)
 - ④北海道地区FDコンソーシアム構想 (安藤)
 - (2) 講演 13:00-14:15
Dr. Jody D. Nyquist (University of Washington, USA; Visiting Professor of Nagoya University), “The Center for Instructional Development and Research’s (CIDR) Consulting Approach to Enhancing Teaching and Learning at the University of Washington”
 - (3) ワークショップ「北大の次世代FDを設計する」(グループ作業と発表) 14:30-16:00
9. 平成20年度弘前大学FDワークショップ「日本語によるティーチング・ポートフォリオの作成」，カナダ・ダルハウジー大学 Lynn Taylor 博士講演「ティーチング・フィロソフィー (授業哲学) について」参加：山岸，山田，11月29日(土)～30日(日)
10. 流通科学大学・特色GP (平成19年度) シンポジウム「公開授業の現状と課題」・全学的授業公開 (OCW制度) システム説明会視察：安藤，山田，12月23日(火)

今年度の調査・研究の成果は高等教育ジャーナル第17号に掲載予定です。なお、平成21年度には以下のような取組を進める計画です。

1. 北海道地区FDネットワーク構想
2. ダルハウジー大学との大学間協定、筑波大学とのFD連携
3. 国際シンポジウムの開催
4. 次世代FD研究会のワークショップ合宿
5. IT活用のFD (FD Bulletin, 「教員支援」HPのリンクの拡大)

6. シラバス・コンクール (仮称) : 各学部・大学院の平成21年度シラバスを点検し、模範となるようなシラバスを選定して公表
7. 全学教育における授業公開制度
8. クリッカーを利用した双方向型授業の普及
9. 授業評価アンケートの改良
10. 学生支援FD, SDとの連携

(安藤 厚)

生涯学習フォーラム 「大学改革におけるFDの意義とこれからの課題」開催

2008年10月8日に、生涯学習計画研究部の客員准教授である愛媛大学教育・学生支援機構の佐藤浩章氏をお招きし「大学改革におけるFDの意義とこれからの課題」と題して講演をいただき、これをもとに活発な意見交換を行いました。

佐藤氏は、大学におけるFDの第一人者であり、今回の講演では、同氏の愛媛大学での取組みをベースにFDを①授業・教授法の改善(マイクロ・レベル)、②カリキュラムの改善(ミドル・レベル)、③組織の整備・改革(マクロ・レベル)の3つに分け、それぞれのレベルについて具体的な取り組み事例を動

画を交えながら紹介していただきました。

①マイクロ・レベルのFDとしては、教員に対する授業コンサルティングなど、②ミドル・レベルのFDとしては、学部カリキュラム改革支援や教育コーディネーター研修など、③マクロ・レベルのFDとしては、同大学のFD体制などについて詳細な報告をいただきました。

また、参加者からは具体的な取組体制や問題点などについて数多くの質問が出されましたが、佐藤氏からは、事例に基づいた貴重なコメントをいただきました。
(亀野 淳)

写真1. 講演をする佐藤浩章客員准教授

魅力ある授業を目指して —第13回北大教育ワークショップ—

1泊2日の教員研修である「北海道大学教育ワークショップ」は昨年度から年2回開催されることになり、今年度2回目の「第13回北海道大学教育ワークショップ」(Faculty Development, FD)が、2008年11月7日(金)、8日(土)の両日、いつもの会場である奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北の湯)で行われました。

研修参加者は、本学の研究科及び研究所等から31名、北見工業大学、帯広畜産大学、北海道教育大学、北海道工業大学、弘前大学、苫小牧工業高等専門学校、旭川工業高等専門学校から1名ずつの研修参加者合わせて38名に、世話係、講師、事務職員など合わせて総勢47名で実施されました。

今回は午前8時15分情報教育館1Fロビーで受付、8時30分に出発しました。奈井江町へのバスに乗ってから、例年のように、参加者の自己紹介で研修会が始まりました。会場に到着後、記念写真(写真1)をとってから、午前9時55分より、表1のようなプログラムで、脇田稔高等教育機能開発総合センター長(副学長)と総長代理・逸見副学長の挨拶(写真2,3)から研修が始まりました。

今回のワークショップのテーマは、「魅力ある授業を目指して」です。授業に予習復習などを体系的に組み込み、与えられる単位に相当する授業内容と学生の学習時間を実現すること、すなわち「単位の実質化」を実現するためにも、魅力ある授業を工夫して学生の学習意欲の向上を図ることが現在求められています。

ワークショップのメインプログラムでは、参加者を5グループに分け、魅力ある授業を実現するための工夫を盛り込んだ新しい授業を設計するという課題でグループ作業を行いました。

授業の設計は、3回のセッションに分けられ、(I)科目名と目標、(II)方略(15回分の授業内容)、(III)「評価基準」の順に行われました。各セッションは、(1)30分程度のミニ講義、(2)小グループに分かれての60分の討論(写真5)、(3)全員が集まった討論の成果の発表会(写真6)、という3つの部分からなり、このセッションを繰り返すという構成で行われ、有意義な会になりました。

写真1. 記念写真

表 1. 第 13 回 北海道大学教育ワークショップ プログラム

2008 年 11 月 7 日 (金)

8:15	受付 情報教育館 1 階ロビー 集合
8:30	バス出発 研修開始
9:45	ないえ温泉到着, 玄関前で記念写真
<hr/>	
10:00	挨拶 脇田副学長
10:10	挨拶 総長代理・逸見副学長
<hr/>	
10:35	ミニ講義「FD の目的と意義」
11:00	休憩
11:15	ミニ講義「学生に自主的学習を促す魅力ある授業」
<hr/>	
12:00	昼食 60 分
<hr/>	
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング (写真 4)
<hr/>	
13:30	ミニ講義「カリキュラムの構成要素とシラバス」, 「学習目標」
14:00	グループ作業 I の課題の説明
14:10	グループ作業 I 「授業の設計 1: 科目名・目標の設定」
15:10	発表・全体討論
<hr/>	
16:00	休憩
<hr/>	
16:20	ミニ講義「教育方略」, 「クリッカーを使う授業

の例」

16:50	グループ作業 II の課題の説明・グループ学習
17:00	グループ作業 II 「授業の設計 2: (目標の手直しと) 方略」
18:00	発表・全体討論
<hr/>	
19:30	講演「ハラスメントの段階 (ステージ) と相 (フェーズ)」 (大畑昇 / 歯学研究科教授)
20:00	懇親会

2008 年 11 月 8 日 (土)

7:30	朝食
<hr/>	
8:30	ミニレクチャー「評価」(30 分)
9:00	グループ作業 III の課題の説明
9:10	グループ作業 III 「授業の設計 3: (方略の手直しと) 評価」
10:10	発表・全体討論
<hr/>	
11:10	休憩
<hr/>	
11:20	参加者の個人的感想や意見
<hr/>	
12:00	昼食 (60 分)
<hr/>	
13:00	バス出発
14:30	JR 札幌駅北口到着

写真 2. 脇田センター長 (副学長) の挨拶

写真 3. 総長代理・逸見副学長の挨拶

より具体的には、参加者全員が専門分野が片寄らないように A, B, C, D, E の 5 グループに分かれ、それぞれのグループが、あらかじめ指定されている

A：一般教育演習

B：一般教育演習

C：一般教育演習

D：特別講義

E：大学院共通授業科目

のような設定の科目を設計するという課題に悩みました。各グループが設計した科目の科目名、目標は表 2 の通りです。

夕食後には、前回 2008 年 6 月の「第 12 回教育ワークショップ」と同様に、前学生相談室長の大畑昇先生に「ハラスメントの段階と相」というタイトルの講演をお願いしました。大畑先生は北大においてセクハラ、アカハラについてずっと取り組んでこられ、北大におけるこの問題の第 1 人者です。

2 日目も無事に終了し、帰りのバスは午後 2 時頃札幌駅北口に到着しました。

(西森 敏之)

写真 4. アイスブレイキング

写真 5. グループ討論

写真 6. 発表会

表 2. 各グループが作成したシラバスから 科目名と目標

<グループ A >

【科目名】一般教育演習「大学～豊かな北大生になるために～」

【一般目標】(授業の目標) ※

- ① 豊かな北大生になるために大学初年度にあたり、大学施設および教職員の利用方法を知る。
- ② 大学における学習方法を知る。
- ③ 地域および国際社会における自己の役割を認識する。

【行動目標】(到達目標) ※

- ① 大学施設および教職員を利用して課題の背景を調べることができる。
- ② シラバスとカリキュラムを理解して自ら学習計画を立案し発表できる。
- ③ 北大生の地域および国際社会での役割を列挙し、自分の目標を構想し、レポートにまとめることができる。

<グループ B >

【科目名】一般教育演習「北海道と世界～ Global issues,Hokkaido perspectives」

【一般目標】学生が将来国際社会で活躍できるようになるために、北海道の地域問題を知り、かつそれと世界とのつながりを理解する。

【行動目標】

- ① 北海道内の諸問題を列挙することができる。
- ② 世界で起きている問題を列挙することができる。
- ③ それらの関係を推論し系統立てて説明することができる。
- ④ 討論およびフィールドワークにより主体的に問題と取組むことができる。

<グループ C >

【科目名】一般教育演習「食って寝て遊んで学ぶ環境論」

【一般目標】

- ① 調査対象を適切に理解し、自分の言葉で表現することができる。
- ② 身近なメディア・モノから環境に関する情報を読み、分類し、感じることができる。
- ③ 得られた情報を活用し、具体的な行動計画を策定することができる。

<グループ D >

【科目名】総合科目「地球環境を人間社会から診る」

【一般目標】

- ① 地球環境問題をより深く理解するため歴史をふまえて現状認識する。
- ② 地球環境問題の解決のため将来的な対策や技術開発について考える。

【行動目標】

- ① 歴史的な環境の変化を説明できるようになる。
- ② 現在、地球環境の変動が及ぼす経済・健康・人間(社会)への影響を説明できる。
- ③ 歴史と現状をふまえ環境問題について議論・批判・評価できる。
- ④ 環境変化に対する技術対策・法制度の対応を説明できる。
- ⑤ 環境問題への新しい対策・法制度の対応を説明できる。

<グループ E >

【科目名】大学院共通授業科目「ホッカイドウ学～北海道の環境と人～」

【一般目標】学部で学んだ専門知識を活かして、地域社会に寄与することを目指して北海道の現状を理解する。

【行動目標】

- ① 社会科学的手法と自然科学的手法を用いて、北海道の現状を分析することができる。
- ② 北海道への深い理解を通じて、地域研究の一つのモデルを構築することができる。

※【一般目標】は北大のシラバスでは「授業の目標」、【行動目標】は「到達目標」に当たります。行動目標(到達目標)は、学生がこの授業を通して身につけるべき能力を具体的に示し、成績評価の基準になります。

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告(第74回)

平成20年12月2日(火)に第74回全学教育委員会が開催され、つぎの議題について話し合いました。

議題

1. 北海道大学全学教育科目規程の一部改正
2. 「パス・ノンパス科目」制度
3. H21年度全学教育科目の開講計画
4. H21年度全学教育科目に係わるTA
5. H21年度の履修調整
6. 全学教育における学生からの成績評価に対する申立て制度
7. H18年度からの新教育課程の検証及びH21年度の実施に向けての検討・改正内容
8. H21年度全学教育部の行事予定
9. H21年度全学教育科目のシラバス作成
10. H21年度入学者に対する履修相談会 MANAVI 実施

報告事項

1. 学部別 GPA・全学教育科目 GPA (第1学期速報値)
2. 英語単位「優秀認定」
3. H20年度第2学期履修者数
4. 成績評価結果に関する報告
5. 2008年度英語IIオンライン授業報告

一般教育演習・総合科目に関する規程の改正

講義と実験を併用する授業などの単位計算基準を見直し、「一般教育演習」「総合科目」を導入科目として位置づけ、「一般教育演習」を「一般教育演習(フレッシュマンセミナー)」に改め、総合科目を1単位に変更しました。

全学教育における「パス・ノンパス科目」制度

来年度から導入される「学生の申請によるパス・

ノンパス科目」制度の細部を確認しました。この制度の導入にともない、体育学A、情報学Iを科目指定の「パス・ノンパス科目」とする従来の制度は廃止されます。また、本制度の名称は「自由設計科目」と改める予定であることが報告されました。

H21年度の開講計画・非常勤講師採用数

来年度の主な科目の開講数は以下のとおりで、総計2,045(20年度は2,076)コマになります。

一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	144
(うち論文指導)	94)
総合科目	59
主題別科目	163
(うち論文指導)	44)
共通科目	203
外国語	546
外国語演習	334
(うち外国語教育センター以外の開講)	72)
基礎科目	305
実験	282
日本語・日本語事情	9

非常勤講師の採用数は、「全学運用枠」356(20年度は403)コマ、「部局経費負担」51(40)コマとなり、「全学運用枠」の採用数をH16年度(710コマ)の半減とする計画はほぼ達成される見込みです。(H21.1現在)

TA採用計画

全学教育のTAの必要理由・人数・経費を検討し、全体で4,357万円(20年度比206万円増)になりました。その理由は①履修者が70名以上の講義でのTA活用を奨励したことと、②CALL授業、中国語、体育学でのTA採用の見直しです。TAを有効に活用して、授業の充実に努めていただきたいと思います。

履修調整のオンライン化

来年度から履修調整はオンラインで行い、学生は抽選科目（外国語演習や一般教育演習）の授業に1週間出てから履修希望を出せるようになります。

成績評価に対する申立て制度

来年度から、全学教育科目について、学生からの成績評価に関する質問や異議申立てを受け付ける制度が導入されます。教務課で申立てを受け付け、学生のクラス担任及び該当科目の科目責任者が事情を聴取し、その報告にもとづいて成績評価審査部会が回答を作成します。

H18年度新教育課程の検証と制度改正

新教育課程及び単位の実質化の検証と来年度の制度改正の内容を確認し、学部・学年別 GPA、履修登録単位数、全学教育科目の科目別 GPA、自習時間の平均、分布、推移などが報告されました。

H20年度1年次1学期のGPA(専門科目を含む)の全学平均は2.38(19年度と同じ)、全学教育科目の成績分布は「秀」12.4(19年度は12.5)%, 「優」33.5(33.6)%, 「良」33.6(33.8)%, 「可」14.0(14.0)%, 「不可」6.5(6.0)%でした。

これらのデータに注目しつつ、今後も、①単位の実質化を目指す授業改善、②学習意欲を向上させる魅力的な授業の開発、③FD研修、④2年次以上の上限設定などを検討することになりました。

行事予定・WEB上での成績確認期間

全学教育部の日程はほぼ例年通りです。抽選科目の登録期間が1週間に延長され、これにともない2週目まで履修者の決まらない授業日(4月17日(金))ができます。学期末に学修簿の配布をやめ、WEB上での成績確認期間を設けます。

入学式	4月8日
1学期授業	4月10日～8月12日

夏季休業	8月13日～9月30日
成績報告締切	8月21日
2学期授業	10月1日～2月8日
冬季休業	12月28日～1月4日
成績報告締切	2月18日

シラバス入力・新項目「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」

シラバスは教務情報システムへ教員が直接入力します。締切は1月30日です。新たな項目として、「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」が追加されています。シラバスの充実と単位の実質化(授業の充実と自習の促進)が求められます。

新入生向けの履修相談会 MANAVI

来年度も上級生の協力をえて新入生への修学サポートを実施します。①ボランティア相談室、クラス担任などを通じて学生を募集し、②日程、指導内容などについて改善を図ります。

主な報告事項

- 成績評価・授業評価結果検討専門部会から、H19年度2学期の成績評価に極端な片寄りがあると思われる15科目について、担当教員からの回答が報告されました。未だ回答のない事例があるのは残念です。H20年度1学期のクラスのGPAが1.80未満、3.0以上の18科目についても、担当教員に事情を照会することにしました。
- 外国語教育センターから、英語IIオンライン授業について、TOEFL-ITP試験の平均点が引き続き上昇し、英語単位「優秀認定」は131(19年度は146)名だったことが報告されました。なお、今年度からTOEFL-ITP受験料が全額補助されています。

(小野寺 彰 理学研究院教授・センター長補佐)

平成 20 年度全学教育科目企画責任者名簿

所 属	職 名	氏 名	授業科目
文学部	准教授	野村益寛	「思索と言語」
外国語教育センター	〃	土永孝弘	〃
文学部	〃	川口暁	「歴史の視座」
法学部	〃	吉田徹	〃
経済学部	教 授	宮本謙介	〃
文学部	准教授	鈴木幸人	「芸術と文学」
外国語教育センター	〃	清水賢一郎	〃
文学部	〃	小田博志	「社会の認識」
法学部	〃	吉田徹	〃
経済学部	〃	谷口勇仁	〃
文学部	〃	川端弘	「科学・技術の世界」
理学部	教 授	松王政浩	〃
工学部	〃	泉典洋	〃
教育学部	〃	大塚吉則	「健康と社会」
〃	〃	水野真佐夫	「体育学」
経済学部	准教授	柿沢佳秀	「統計学」
工学部	教 授	栗原正仁	「情報学」
文学部	准教授	松江崇子	「外国語科目」
法学部	〃	桑原朝雅	〃
外国語教育センター	教 授	上田信雅	「英語」
〃	准教授	橋本聡子	「ドイツ語」
〃	〃	鍋島孝子	「フランス語」
〃	教 授	山田吉二郎	「ロシア語」
〃	准教授	岡田敦美	「スペイン語」
〃	〃	飯田真紀	「中国語」
〃	〃	玄岩武雅	「韓国語」
〃	教 授	上田信誠	「英語演習」
文学部	〃	清水美志	「外国語演習」
教育学部	准教授	大竹政岳	〃
法学部	〃	中島志	〃
経済学部	教 授	久保田肇	〃
外国語教育センター	准教授	橋本聡子	「ドイツ語演習」
〃	〃	鍋島孝子	「フランス語演習」
〃	教 授	山田吉二郎	「ロシア語演習」
〃	准教授	岡田敦美	「スペイン語演習」
〃	〃	飯田真紀	「中国語演習」
〃	〃	玄岩武雅	「韓国語演習」
〃	〃	川崎和恵	「外国語特別演習」
文学部	教 授	千葉和恵	「人文・社会科学の基礎」
教育学部	〃	姉崎洋一	〃
法学部	〃	松浦正孝	〃
経済学部	〃	小島光一	〃
理学部	〃	北保孝文	「数学」
〃	准教授	北谷孝文	「物理学」
〃	教 授	谷野圭持	「化学」
〃	〃	山口淳二	「生物学」
〃	〃	池田隆司	「地学」
文学部	〃	和田美生	「心理学実験」
理学部	准教授	松山冬彦	「自然科学実験 (物理学系)」
〃	教 授	松田冬彦	「自然科学実験 (化学系)」
〃	准教授	増田隆一	「自然科学実験 (生物学系)」
〃	〃	知北和久	「自然科学実験 (地学系)」
〃	〃	〃	「基礎自然科学実験」
留学生センター	〃	中村重穂	「日本語・日本事情」

高等教育 HIGHER EDUCATION

2008年第2回クラス担任会議（学生支援FD）を開催

「学生中心の教育」を具体化するため、また近年は修学指導、心のケアの充実などの観点から、学生一人ひとりに目を向けた学生支援の充実・強化が重要な課題となっています。

特に初年次の学生支援を充実するため、クラス担任マニュアルを整備してクラス担任の役割を明確にし、毎年クラス担任アンケートを行なって制度・仕組みの改善に努めてきました。来年度に向けてクラス担任に関する要項案の検討もはじまっています。

クラス担任のみなさんにその仕事・課題をより深く理解していただき、ご協力をえて学生支援の充実・改善を図るため、昨年度からクラス担任会議を秋にも開催するようになりました。今年度は2回目のクラス担任会議を「学生支援FD」と位置づけ、グループ討論を取り入れました。はじめての試みで準備不足の面もあり、日程、内容などについて多くの課題が残りましたが、来年度は早めに日程を周知し、内容の充実を図る予定です。（安藤 厚）

2008年第2回クラス担任会議（学生支援FD）

日時：平成20年10月28日（火）13：30～17：30

場所：情報教育館 3階 スタジオ型多目的中講義室

司会：小野寺 彰

脇田 稔副学長 あいさつ

報告：学生の学修状況（GPA、自習時間等）について 高等教育開発研究部長・安藤 厚

報告：ハラスメント問題とカルト「団体」問題の注意点・連続3回欠席学生への指導について
前学生相談室長・大畑 昇

報告：南門周辺の迷惑駐輪について 学生支援課学生生活・相談担当

講演：心のケア～自殺防止にむけての取り組みについて～ 保健管理センター・武田 弘子

講演：特別な教育ニーズをもつ学生への修学支援 学生相談室・葛西 康子

グループ討論と全体発表：「自殺防止」「修学支援」の方策について 指導：安藤、大畑

来年度、授業改善の切り札「クリッカー」貸し出し開始

現在、アメリカでは「クリッカー」と呼ばれる機器を利用して、授業の活性化に成功している教員がたくさんいます。クリッカーとは、学生一人ひとりに専用のリモコンを配り、先生が授業中に出题したクイズに学生が回答するシステムです。回答分布は即座に集計され、ボタン一つでスクリーンに表示されます。授業に対する学生の集中度・満足度を上げるのは大変ですが、クリッカーを使うことで比較的容易に授業改善が可能です。たとえば、以下のような効果があります。

- ・ 学生参加型の授業
- ・ 学生の理解度をリアルタイムで把握
- ・ 学生がクラス全体の理解度を把握
- ・ 休憩の役割
- ・ 記憶定着率の向上
- ・ 出席調査の自動化
- ・ 居眠り防止
- ・ アンケート

特に、大人数のクラスでも、講義という形態を維持しつつ、学生が能動的に授業へ参加できるように

なるところが高く評価されています。それは、教育先進国であるアメリカで、毎年数百万台のペースで売れ続けていることからもうかがえます。

北大では、2007年4月に日本の高等教育機関では初めてクリッカーを導入し、基礎物理学等の授業で使用してきました。その後全国の大学でも急速に普及しつつあります。

高等教育開発研究部では、FD研修会等においてクリッカー実演のミニレクチャーを行っています。参加された先生方からの関心が高く、問い合わせを多く頂いていました。

そこで、たくさんの先生方がクリッカーを利用できるように、貸出用のクリッカーを「次世代FD研究会」の経費で購入することになりました。来年度4月から教務課での貸し出しに向けて、3月に利用希望教員向けの説明会を開催する予定です。使ってみたい方、どのようなものか興味のある方は、どうぞお気軽にご参加下さい。詳しくは、高等教育開発研究部のホームページをご覧ください。

<http://socyo.high.hokudai.ac.jp>

(山田 邦雅)



写真1. クリッカー（右）と受信機（左）

写真2. 授業風景

着任のごあいさつ

生涯学習計画研究部 准教授 三上 直之

羽田空港から北海道に向けて飛び立つと、飛行機はすぐに針路を東にとり、眼下に東京ディズニーランドのある浦安の埋立地が現れます。さらに東の方、幕張新都心へと続く埋立地と、この浦安の埋立地との間に、鑿でくりぬいたようにぽっかりと海が広がっている所があります。ここは、東京湾にわずかに残された干潟の一つ、三番瀬。1990年代末から6年半、東京の大学院で学んでいたころ、住民参加による環境再生計画づくりのプロセスをテーマにした社会調査のため、通いつめたフィールドです。

私の専門は社会学で、地域の環境問題をめぐる合意形成のプロセスを主なテーマとして研究してきました。同時に、環境や科学技術に関する政策を市民参加でつくっていくための会議やワークショップの手法についても、みずから実践しつつ学んできました。

そうした研究や実践を通して、多様な経験や知識、利害関心を持った人々が知恵を集め、公共的な課題についてよりよい判断(「何が公共的な課題か」ということも含めて)をしていくにはどうすればよいか、というテーマを、社会学の視点や方法を軸に考えつづけています。

2005年、ご縁があつて、約30年暮らした千葉を離れ、特任教員として北海道大学に赴任しました。科学技術コミュニケーター養成ユニット

(CoSTEP)で、昨年10月まで約3年間、一般の方々と研究者との橋渡しをする人材の養成に携わり、対話の場のデザインやファシリテーションの演習、サイエンス・カフェ、コンセンサス会議などの実践活動などに取り組みました。

専門家と市民との間のコミュニケーションに関する教育研究と、現場での実践とを同時に求められる職場で、やりがいに満ちた時間を過ごさせていただきました。

昨年11月からは、高等教育機能開発総合センターの専任教員となり、生涯学習計画研究部に配属されました。この研究部のミッションは、生涯学習計画の研究、とりわけ高等教育機関における生涯学習のあり方を研究し、北大を含む大学の生涯学習の機能をさらに開発することにあります。住民参加による地域計画づくりや、研究者と市民とのコミュニケーションなど、私が取り組んできたテーマともきわめて関わりの深い仕事です。これまでの経験をふまえて、センター教員としての使命を果たせるよう、教育研究に一生懸命取り組んでいきたいと思えます。何とぞよろしくお願ひいたします。

平成 20 年度全学インターンシップ実績

生涯学習計画研究部では、キャリアセンターと共同で、全学インターンシップを平成 16 年度より全学教育科目として実施していますが、平成 20 年度も夏季休暇を中心に実施しました。学部・研究科(学

院)、学年別の参加者数は表 1 のとおりで、昨年度とほぼ同じ 76 名が参加しました。今後は、本インターンシップの成果をより高めるため、参加者のレポート作成などを行う予定です。(亀野 淳)

表 1. 平成 20 年度 全学インターンシップ参加人数

区分	学部等	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	M1	計	
全学 インター ンシ ップ	学部生	文学部	3	1	8				12
		教育学部		1	5	1			7
		法学部	1	1	8				10
		経済学部		5	10				15
		理学部		1	2				3
		工学部		1	7	1			9
		農学部			3	1			4
		獣医学部					1		1
		水産学部		1	4				5
	小計	4	11	47	3	1		66	
	大学院生	環境科学院						4	4
		理学院						4	4
		農学院						2	2
		小計						10	10
合計		4	11	47	3	1	10	76	
※CEEDへ	工学研究科						26	26	
	情報科学研究科						10	10	
※国際広報メディア・観光学院							1	1	
※公共政策学教育部							3	3	
合計		4	11	47	3	1	50	116	

※は全学インターンシップ枠をまわしたもの

公開講座「生涯学習計画セミナー」を実施

生涯学習計画研究部主催で、生涯学習・社会教育の専門職員や地域のリーダーを対象とする継続教育型(専門型)の公開講座「生涯学習計画セミナー」を、12月13日(土)・14日(日)の両日、情報教育館で開催しました。地域格差の広がり、地方財政の危機のもとで生涯学習・社会教育関連予算の削減、市町村合併の推進、指定管理者制度の導入が進み、その公共性が改めて問われている生涯学習・社会教育について、市民の学習活動を基礎にどのように展望を切り開くかについて学習をするものです。

1 日目前半は、鈴木敏正教育学研究院教授が「地

域再生と『生涯教育』の課題」、木村純生涯学習計画研究部教授が「地域住民の生涯学習の課題と展望」を講義し、1 日目後半は、「地域を知る学びから地域を作る学び」をテーマに、垂石寛史札幌市生涯学習センター事業係長「『さっぽろふるさと学の集い』を実施して」、中島宏一(北海道開拓の村学芸員「芝居『漁場の1年』を上演して」の報告を受けて討論をしました。

2 日目は、「学習が作りだす新しいつながり」をテーマに、佐々木一也八雲町立図書館司書が「『イキ道南-道南の社会教育実践集-』を編集・発

行して」、高橋徹苦小牧市文化交流センター館長が「『障がい者パソコン教室』の実践」を報告しました。前日に続き、熱心な質疑・討論が行われ、北海道の厳しい状況にもかかわらず、地域では住民の生涯学習活動が前進している事例が少なくないことが明らかになりました。

有料の受講者が15名、アドバイスをする大学関

係者、地域の学習リーダーを含めると41名が参加しました。参加者の内訳は、札幌市教育委員会、安平町教育委員会、西興部村教育委員会、北海道開拓の村ボランティア、札幌市芸術の森ボランティア、札幌ボランティアコーディネーター研究会、手稲ふれあいボランティア、北星学園大学、北翔大学等でした。(木村 純)

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

フィンランドにおける大学入試の事例

入学者選抜研究部 准教授 池田 文人

フィンランド共和国（以下、フィンランド）を2009年1月8日から15日（現地時間）に訪問し、同国の教育制度、大学入学資格試験、オウル大学の教員養成課程における大学入試および授業内容についてインタビュー調査を行いました。本稿ではオウル大学の教員養成課程における大学入試に絞って報告します。

オウル大学教育学部教員養成課程の毎年の募集人員は80名であり、応募者は毎年約2,000名です。本課程はクラス担任コースと科目担任コースに分かれています。フィンランドは小中一貫の9年制ですが、1年から6年までは全教科を教えるクラス担任の資格を持つ教師が、7年から9年までと高等学校は科目担任の資格を持つ教師が各科目を教えます。クラス担任の資格を取得するためには本課程の学部3年間と修士2年間の履修が必要であり、科目担任は、各科目を専門とする学部と修士を修了した上で、本課程での1年間カリキュラムの履修が必要です。

本課程の入試では、高等学校の卒業に必要な単位の習得とその成績、大学入学資格試験における必要科目の合格とその成績、一部の受験者については大学が課す学科試験の成績、そして面接試験の成績が考慮されます。大学入学資格試験の成績で足切りが

行われ、この成績の極めて高いグループは学科試験が免除されます。面接試験に進めるのはおよそ100名です。

大学入学資格試験は国家試験であり、現在、以下のような科目を受験しなければなりません。まず、国語試験が必修です。フィンランドの国語はフィンランド語とスウェーデン語の二カ国語であり、サーミ語が話される地域ではサーミ語を公用語とすることが法律で認められています。フィンランド語を母語とする人が国民の90%以上を占め、次いでスウェーデン語が約5%です。国語の他は、第二国語、外国語、数学、科学と人文（物化生地、健康、宗教、倫理、歴史、哲学、心理学などの各分野からの問題と融合問題から選択して解答）の四科目から三科目を選択しなければなりません。外国語と数学はそれぞれ基礎と応用の二種類が、第二国語については中級と上級の二種類があり、高等学校での履修状況に関わらず、受験者は好きな方を選択できます。多肢選択式問題であり、試験結果は合否と7段階のグレードが科目ごとに与えられます。

学科試験は科目担任コースを志望する大学入学資格試験の成績が高くない受験者に課され、志望する科目の学科試験を受験します。この学科試験は筆記試験であり、オウル大学、トゥルク大学、タンペレ大学の教員養成課程が共同で作成し、利用しています。

面接試験では受験者を5グループに分け、各グ

ループを2名の面接官が受験者を一人ずつ30分間で試験します。2名の面接官は、本課程の大学教員と現職の初等中等学校の教師で構成されます。受験者がクラス担任志望であれば現職のクラス担任教師が、科目担任志望であれば現職の科目担任教師が面接官となります。面接では、専門とする科目の基礎知識、問題解決能力、人物の三つの観点から評価します。問題解決能力としては、「銃の乱射事件を起こした学校であなたが担任になった場合にどうするか?」、「森に行ってコンピュータ教育を行うとしたらあなたはどうするか?」など、実際の教育において遭遇しうる予想外の困難な問題に対処する能力を評価します。人物評価では、教師への動機、教師という仕事への責任感、教育能力、適正、総合評価の5つの項目についてそれぞれ1点から3点までで評価します。

教師の初任給は、クラス担任で約2,500円/月、科目担任で約3,500円/月であり、これはフィンランド全体の平均並です。にもかかわらず教師志望者が極めて多い理由は、社会全体が教師を必要としており、社会的ステータスが高く、仕事条件がよいた

めです。仕事条件のよさとしては、担当する授業のカリキュラムや使用する教科書などを自分で決めることができ、年間の休暇が2ヶ月あることなどが挙げられます。

以上、今回の調査について、大学入試に絞って紹介しました。フィンランドは国際学力調査等でその学力の高さが話題になっています。その大きな要因として教師の質の高さが挙げられています。今回の調査により、質の高い教師を育てるための大学入試段階での仕組みの一端が明らかになりました。今回の調査では、初等中等教育で使用されている理数系の教科書や大学入学資格試験の過去問、そしてオウル大学では理数科目の学科試験の過去問、面接試験で使用される評価シート等を資料として入手できました。今後はこれらの資料を分析するとともに、他学部や他大学での入試の現状についても調査していきます。

なお本調査は大学院理学研究院の理数応援プロジェクトの一環として行わせていただきました。本調査の機会を与えていただいた同院の小野寺彰教授に感謝します。

センター日誌 CENTER EVENTS, October - December

10月

- 1日 ・(訪問) 三重県津東高校
- ・(訪問) 長野県飯田風越高校
- 2日 ・(訪問) 兵庫県香住高校
- ・(会議) 第5回教育改革室会議
- 4日 ・(公開講座) 大学職員セミナー
- 5日 ・センターニュース第76号発行
- 8日 ・(会議) 第4回大学院教育検討WG
- ・(会議) 第4回センター運営委員会
- ・(訪問) 大阪府天王寺高校
- 11日 ・(訪問) 大阪教育大学附属高校
- 14～21日 ・(行事) AO入試・帰国子女特別選抜願書受付
- 15日 ・(訪問) 愛媛県新田高校
- ・(訪問) クラーク記念国際高校
- 21日 ・(訪問) 滝川高校
- ・(訓練) 高等教育機能開発総合センター、附属図書館北分館、メディアコミュニケーション研究院、情報教育館・放送大学北海道学習センター合同消防訓練
- 25日 ・(行事) 北大生と巡る「秋のキャンパスツアー」
- 27日 ・(会議) 第5回大学院教育検討WG
- 28日 ・(会議) 第2回共通授業検討専門委員会
- ・(会議) 第2回クラス担任会議
- 30日 ・(会議) 第6回教育改革室会議

11月

- 1日 ・(行事) 北海道大学進学相談会(東京・大阪)開催(大阪会場)
- 3日 ・(行事) 北海道大学進学相談会(東京・大阪)開催(東京会場)
- 4日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- 5日 ・(行事) AO入試・帰国子女特別選抜第1次選考結果発表
- 7～8日 ・(行事) 第11回FD研修会(奈井江町農業構造改善センター)
- 13日 ・(行事) 次世代FD研究会ワークショップ
- ・(訪問) 札幌稲北高校
- 16日 ・(行事) AO入試・帰国子女特別選抜第2次選考日
- 20日 ・(談話) 平成20年度第1回遠友学舎戸辺談話
- ・(会議) 第44回生涯学習計画研究委員会
- 25日 ・(会議) 成績評価・授業評価結果専門部会
- 26日 ・(会議) 第3回共通授業検討専門委員会
- 28日 ・(会議) 第145回全学教育委員会小委員会
- ・(説明会) 鳥取県八頭高校に対する大学説明会(プロフェッサービジット企画)

12月

- | | | | | |
|-------|---|------------------------|---|-----------------------------------|
| 1日 | ・(会議) 入学者選抜委員会 | 12日 | ・(会議) 第5回センター運営委員会 | |
| 2日 | ・(行事) AO入試・帰国子女特別選抜合格発表
(大学入試センター試験を課さない学部・学科) | ・(訪問) 静岡県下田高校 | 13日 | ・(訪問) 大阪府桜宮高校 |
| | ・(会議) 第74回全学教育委員会 | 15日 | ・(説明会) 和歌山県日高高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画) | |
| 5日 | ・(会議) 第7回教育改革室会議 | ・(会議) 第50回教務委員会 | 16日 | ・(会議) 第2回北海道大学における高大連携在り方
検討WG |
| | ・(訪問) 立命館慶祥高校 | ・(訪問) 岩見沢緑陵高校 | 18日 | ・(訪問) 徳島県池田高校 |
| | ・(説明会) 新潟県新潟高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画) | ・(談話) 平成20年度第2回遠友舎炉辺談話 | ・(会議) 第111回公開講座実施部会 | |
| 5～11日 | ・(行事) AO入試合格者入学手続
(大学入試センター試験を課さない学部・学科) | 22日 | ・(会議) 第2回点検評価委員会 (持ち回り) | |
| | ・(行事) 帰国子女特別選抜合格者入学手続 | 25日 | ・(会議) 第8回教育改革室会議 | |
| 8日 | ・(会議) 第1回大学院教育検討WG・共通授業検討
専門委員会合同会議 | | | |
| 9日 | ・(説明会) 栃木県小山高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画) | | | |

行事予定 SCHEDULE, January-February

【日(曜日)】

【行事】

- | | | |
|----|---------------|-----------------------|
| 1月 | 6日(火) | 授業再開 |
| | 16日(金) | 休講: 大学入試センター試験準備のため |
| | 17日(土)～18日(日) | 大学入試センター試験 |
| | 21日(水) | 水曜日の授業の終了日(16週目) |
| | 22日(木) | 木曜日の授業の終了日(16週目) |
| | 27日(火) | 火曜日の授業の終了日(16週目) |
| | 28日(水) | 月曜日の授業を行う日 |
| | 29日(木) | 初習外国語統一試験日(木曜日の授業終了済) |
| 2月 | 3日(火) | 月曜日の授業を行う日 |
| | 4日(水)～5日(木) | 授業を行わない日(水, 木曜日の授業終了) |
| | 6日(金) | 金曜日の授業の終了日(16週目) |
| | 9日(月) | 月曜日の授業の終了日(16週目) |
| | 9日(月) | 第2学期授業終了日 |
| | 12日(木) | 成績報告締切(非常勤〔帳票〕) |
| | 19日(木) 正午 | 成績報告締切(常勤〔Web入力〕) |
| | 25日(水) | 北海道大学第2次入学試験(前期日程) |
| | 27日(金) | 1年次学修簿配付日 |

センターニュース 2009, No. 77 目次

<巻頭言>大学の社会貢献とこれからの 生涯学習 松井 博和	1	来年度、授業改善の切り札「クリッカー」 貸し出し開始	14
平成 20 年度「次世代 FD 研究会」の活動	4	着任のごあいさつ 三上 直之	15
生涯学習フォーラム「大学改革における FD の意義とこれからの課題」開催	5	平成 20 年度全学インターンシップ実績	16
魅力ある授業を目指して —第 13 回北大教育ワークショップ—	6	公開講座「生涯学習計画セミナー」を実施	16
全学教育委員会報告(第 74 回)	10	フィンランドにおける大学入試の事例 池田 文人	17
平成 20 年度全学教育科目企画責任者名簿	12	センター日誌・行事予定	18
2008 年第 2 回クラス担任会議(学生支援 FD)を開催	13	目次・編集後記	20

編集後記

冬真っ盛り(こんな表現はないか?)の北海道である。北海道での生活が 10 年以上となり、少々のことでは驚いたり、感動しなくなったのはその年月と年齢のためかもしれない。

先日、本州への出張の帰りに空港に行くと、新千歳空港が大雪で、4 時間待った後、結局、欠航となってしまった。穏やかな海からの日差しを浴びながら信じられない感もあったが、「雪なら仕方ないか」とあきらめるしかなかった。これが航空機の故障などの人為的トラブルなら気持ちも変わっていただろう。しかし、雪国で生活する以上、こうした自然には逆らえないのである。だが、東京で生活していた時にはほとんどなかった感覚である。これも北海道生活の年月と年齢かもしれない。北海道外から多くの学生が北大で学んでいるが、自然とのかかわり方もぜひ学んでほしい。(かめ)

センターニュース 第 77 号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2009 年 1 月 25 日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目

電話 (011)716-2111 ・FAX (011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅・安藤厚

木村 純・川初清典・亀野 淳・三上直之

山岸みどり・鈴木 誠・池田文人

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>